

〔特集：地域が誇る農の逸品2025〕

## 「シャトー・メルシャン <sup>まりこ</sup> 椀子ヴィンヤード」が自然共生サイトとして正式認定 —キリングroupと農研機構が挑むネイチャーポジティブ—

楠本 良延

農研機構西日本農業研究センター 中山間営農研究領域 生産環境・育種グループ

### 1. はじめに

限りある地球の自然環境や生物多様性の損失に歯止めをかけ、回復傾向に向かわせる「30by30」や「ネイチャーポジティブ」に注目が集まっている。

30by30とは2022年の生物多様性条約第15回締約国会議（COP15）で採択された環境保全目標であり、2030年までに地球の陸と海それぞれ30%の面積を保全するというものである。自然生態系の劣化を防ぐために、自然が適切に保全されている地域を一定面積以上、保全することが必要という考え方に基づいている。

ネイチャーポジティブとは社会活動から生じる自然環境への負の影響を抑え、生物多様性の維持からさらに踏み込み、生物多様性を含めた自然資本を回復させることを目指す新しい概念である。近年、企業における経済活動においても、その重要性が増している。

わが国においても、ネイチャーポジティブ実現に向けた重要な取り組みの一つに30by30目標を位置づけている。現在、日本の取り組み状況は陸域20.5%、海域13.3%を国立公園などの保護地域として保全しているが目標には届いていない。目標達成の鍵になるのが自然共生サイト（OECM）である。自然共生サイトとは、「民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている区域」を国が認定する制度である。認定区域は、OECMとして国際データベースに登録される。認定の対象は、企業が管理する水源の森、ビオトープ、里地里山、企業敷地や都市の緑地などの二次的自然も含む。本稿では日本ワイン用のブドウ生産により維持される生物多様性を評価・可視化することが自然共生サイトとして正式認定につながった研究事例を紹介する。

### 2. ヴィンヤードが育む生物多様性

ワイン用のブドウ畑をヴィンヤードと呼ぶ。ヴィンヤードにより維持される生物多様性を解明するため、2015年から農研機構とキリングroupの共同研究が開始され

た。その研究成果を活用し、2023年10月、キリングroupのシャトー・メルシャン椀子（まりこ）ヴィンヤード（長野県上田市）が、環境省による自然共生サイトに正式認定された。キーワードは二次的自然と草原環境である。

国立公園などに指定されている手つかずの自然を原生的自然と言う。一方、主に農業により創出、維持・管理されている自然を二次的自然と言う。その二次的自然の中でも近年、最も面積の減少が著しい自然環境が草原である。1880年代の日本の草原面積は国土の30%を占めていたが、現在では1%にも満たない。かつて、草原から得られる草資源は田畑に敷く緑肥、堆肥の原料、農耕用牛馬の餌、かやぶき屋根などの建材として人間の暮らしに必須の資源であった。しかし、燃料革命以後は草資源は需要がなくなり身近から急速に消失した。以上の理由から、草原環境に生息する生物は全国的に減少傾向であり、将来絶滅が心配される種も多く含んでいる。

そのような中、シャトー・メルシャンは畑作放棄地を垣根仕立て・草生栽培の日本ワイン用ブドウ畑に転用した（写真1）。ブドウ樹の下や樹間に広がる下草を定期的に刈ることにより、約30haに及ぶ良質で広いヴィンヤードという草原環境が創出された。ヴィンヤードにおいてわれわれは、植物相にはフロラ調査、チョウ類、トンボ類、鳥類にはルートセンサス調査を各分類群に適した時期と頻度で実施した。その結果、スズサイコ、



写真1 垣根仕立て・草生栽培により草原環境を創出



写真2 ブドウの樹上に営巣が確認されたホオジロ



写真3 ヴィンヤードを活用した環境教育



写真4 オオルリシジミとクララ (長野県安曇野市)

ユウスゲ、メハジキ、クララなどの289種類の植物、ウラギンスジヒョウモン、オオムラサキ、キマダラモドキ、オツネトンボなど168種類のチョウ類・トンボ類、ヒバリ、ホオジロ (写真2)、キジ、シジュウカラなどの23種類の鳥類が確認された。主に草原を生息地とする生物が多く確認され、環境省レッドデータブックに掲載されている絶滅危惧種を含む多様な生態系を維持し

ていることが明らかになった。これは、ワイン生産により維持されている生物多様性ととらえることができる。

### 3. 生物多様性を活用した地域貢献

椀子ヴィンヤードは共同研究により明らかになった生物多様性を活用し、地域の環境教育の場として機能している。地元小学校の生徒を対象にヴィンヤードが持つ自然環境を学べるプログラムを展開している。具体的にはヴィンヤードが有する生物多様性を現場で観察する試みと (写真3)、草原性の植物であるクララの保全活動を実施している。クララは希少種であるが、オオルリシジミという絶滅危惧種であるチョウの唯一の食草 (エサ) でもある (写真4)。オオルリシジミは大変人気のある美しいチョウであり、本州では長野県の一部にしか生息していない。かつては上田市にも生息していたが現在は消失している。椀子ヴィンヤードより4km程度離れた東御市には自然個体群が確認されている。椀子ヴィンヤードおよびその周辺でクララを保全し個体数を増やしながら将来的なオオルリシジミの再定着に期待している。クララやオオルリシジミは環境保全活動のアイコンであり、それらを通してヴィンヤードの貴重な自然環境を学ぶことに意味があると考えている。

他にも、従業員を対象にしたヴィンヤードの環境学習プログラムの推進、保全活動については地元の環境保護団体との連携・協働も進んでいる。椀子ヴィンヤードの生物多様性を活用した地域貢献の好事例と言えよう。

### 4. おわりに

キリンググループでは、ワイン造りを通じて維持される生物多様性を評価・可視化した結果を、積極的に広報することで、企業イメージやワインの付加価値向上につなげている。そして、消費者はワインを購入することで生物多様性保全に貢献できる。また、ワイン愛好家は、テロワールというワインを生み出す風土の情報を重要視することから、生物多様性の情報は高い価値を持つ。さらに、地域住民は環境教育の場としてヴィンヤードを活用し、将来的に地域の自然環境を守る人材、または企業、商品のファンとなる可能性もある。椀子ヴィンヤードは、生物多様性の評価・可視化の研究が、企業、消費者、地域住民にとって有用な価値のある三方良しの研究として機能している事例である。

〒765-0053 香川県善通寺市生野町2575

(くすもと よしのぶ)